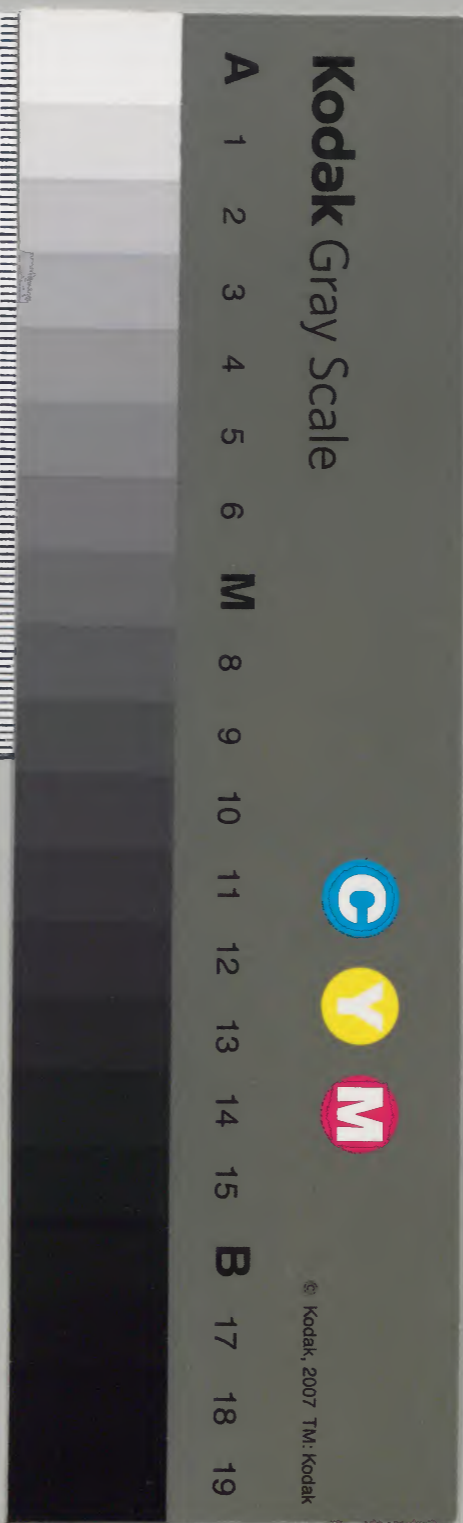


飛列志附録

				和書門類
一〇册	二架	一〇四函	二九一七號	

庫	文	閣	内	
七函	一〇册	二九一七號	和書類	

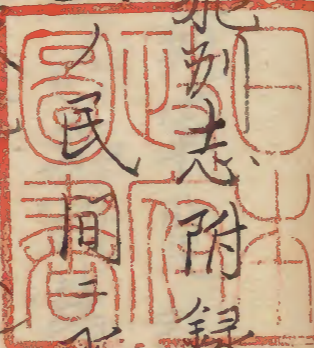
内閣文庫	
番號	和 29117
冊數	10 (10)
函號	174 204



教部省
文庫印

飛列志附録

内一〇二三號

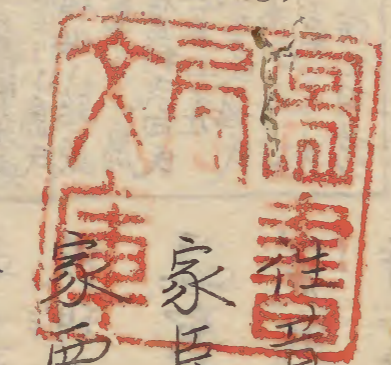


木上ノ民書
 三記ト云ヘル三書アリ
 按スルニ是往昔ノ説
 後世ノ國人其事實ヲモ不糺ミタリニ誌セ
 七ノト見エテ来由年代等甚々符合セス見ルニ
 益無ト云トモ此国ノ書ト稱シ来ル久シ故ニ
 今止更ヲ得ナルモノヲハ聊カ頭書ニ記シテ知ラシ
 ムルノミ詳ナルニハ不及

○飛列軍覽記

○飛列諸將之事

内一〇二三三號



昔人皇七十八代二條院ノ御宇ニ平相國清盛ノ
 家臣飛驒三郎左門尉景綱當國ヲ出シヨリ以來平
 家西海ニ七ニ源氏モイマタ太平ヲ得ス國士長ク此仕ヲ
 止メテ列内ニ於テ至タル人ナキカクノ國士在リ所ニ
 蜂起シ已ニ其威ヲ振ヒ強キモノハ弥ソヨク弱キモ
 ノハ益弱ク民ヲムサホリ仁義ヲミチフサキ或ハ治
 メ或ハ亂シトテ合戦止ムトナシ平家七ニテ後源
 家三代北條モ九代ニシテ悉ク亡タリ其後國ノ諸士

持之ニ國説或ハ其
 家系ト稱スルモノヲ
 見ルニ三木氏ハ藤
 原氏ノ源姓其先
 江州京極家臣
 鎬山氏本氏平野
 信別ノ人ノ内島氏
 八橋姓本氏和田
 一宮氏本氏ノ人本
 性氏未詳細氏ハ
 同氏ハ平姓ノ廣
 淡氏ハ本氏未由
 未詳廣康本氏
 ノ在谷タリ小島氏
 八藤姓飾小路家
 ノ餘裔ニシテ小島
 氏小鷹利氏向氏
 アリ各本上ノ在
 城郡ニ載タリ其
 條下ニ併セ可考

所々ニ起ツテ聖治ノ沃ヲ蒙ムラス美貞尊氏モ合戦
 シテ天下久ク静カ成ラス其後飛別ニ於テ兵威ヲ振テ者
 少カラス先ツ益田那櫻洞ノ城ニ六守多原氏ノ後胤
 三木右京大夫自綱後大野郡松倉ノ城ニ住ス大野郡鎬
 山ノ城ニ鎬山豊後守安室曰白川ノ城ニ内島兵庫及
 氏理家臣河尻備中守氏信山下豊前守定安曰山下ノ城
 三宮右五門大夫国綱曰江名子ノ城ニ細六郎右五門尉休高
 荒城郡高直ニ桓武帝ノ後胤江馬九馬及小四郎
 時盛曰廣康高堂ノ城ニ利仁將軍ノ後胤廣瀬山
 城守宗城家臣河尻右近田中及三右五門一族堀越前守

持之ニ塩屋氏未
 申未詳今世本上
 氏所持名所ノ三
 才自綱ノ文書ニ
 當所塩屋筑前
 守敬ト記ス書ア
 リ然レニ甲陽軍
 鑑ニ飛騨半國ノ
 主シラヤ筑前ト云
 ツ日本古今治乱
 記ニ飛騨国ノ任
 人白屋筑前守
 秋貞トアリ而説
 未詳

曰松崎ノ城ニ小島九近將監時光曰小鷹利ノ城ニ
 飾小路ノ宰相藤原頼綱入道明山家臣牛丸又右五
 門重頼曰小島ノ城ニ右近太夫曰古川蛤ノ城ニハ
 塩屋筑前守等

塩屋筑前守討死之事

塩屋筑前守ハ越中国ニ討入テ新川郡ヲ攻取椽
 倉ノ城ニ居住シ越後ノ上杉入道謙信ニ属セリ天
 正四年三月上杉越中ニ入テ所々ニ働キ塩屋筑
 前守ヲ先鋒トシテ飛騨国ハ討入給フ此時ニ於テ江
 馬時盛勢尽テ亡フ小鷹利ノ城至国司飾小路

格元此江馬梅
 盛天正四年上夜ト
 戦七フトアルハ
 相違江馬家之域
 七天正十年今世
 才土之民多持スル
 処天正五年日六
 年寺ノ文書アリ

頼纜朝臣卒去セラルル其子ノ若年タルニヨツテ家臣
 牛丸又太郎大将分ナリ成長ノ後姉小路尹纜
 朝臣ト云其跡ヲ家臣牛丸又太郎平重親其子
 藏人親吉其子又太郎細親迄三代小鷹利ノ
 城主ナリ其頃信長謙信ノ旗下ニ附タル哉中加賀ノ
 面ニ互ニ合戦止リナシ仍テ謙信ヨリ兵ヲ加列ヘ進メラルニ依テ
 織田信長公ヨリ軍勢ヲ向ラル軍將前田又左門尉
 利家柴田伊賀守勝豊佐久間玄蕃允盛正金
 杰五郎八長近魚彦次郎師頼等加列官ノ腰
 ニテ對陣セリ其後マタ哉中ノ諸將ニ謙信ハ勢ニ

給イケレ氏終ニ獲倉落城ニ筑前守討死ス

飛列江馬家之事

抑當国江間家ノ先祖ヲヨ守ルニ桓武天皇ノ後胤
 平相国清盛ノ舎弟修理大夫経盛卿ノ子ニ平
 家西海ニ沉亡セシヨリ以来彼妾カナリ孤子ヲイ
 タキテ身ノ置所ナキ折カラ北條ノ時ニニカタラ
 ヒ彼孤子ヲ養育ス日ヲ重子月ヲコエテ成長シ
 江馬小四郎経経ト名乗ル時ニノ長子ノ美時ト
 イツノ頃ヨリカ不和成シカ後美時ニアタナナシ
 トハカル美時早ク冥色ヲオトリテ頼家公ノ仰

梅元此江馬
 格元此江馬梅
 盛天正四年上夜ト
 戦七フトアルハ
 相違江馬家之域
 七天正十年今世
 才土之民多持スル
 処天正五年日六
 年寺ノ文書アリ

ナリト偽リ則得経ヲ飛驒国ハ流シ遺シタリ然レ
ニ高直ト云所ニ代々住シ子孫相統ス高直ニ在城
シテ高直郷ヲ領ス清盛ノ皇室小鳥ノ大刀一文字
ノ薙刀青葉ノ笛等ヲ持傳テ家宝トス其
後得経ヨリ十代ニシテ九馬及時盛其子常陸少
将経ニ至ツテ武威ヲ振哉中ニ討入新川郡ヲ却取ルト

飛驒国司滅亡之事

国司佈小路頼纒朝臣ハ小鷹利ノ城主シ先祖代々
公家ヨリ出テ當国ノ国司タリ建武年中後醍醐
天皇南朝ニ皇居ノ時當列ノ国司ニ定メ給フ四

持スルニ飛驒国
司佈小路頼纒
南朝ヨリ神任
国司トシ上毛頼
纒入并ニ平目尹
纒上モ佈小路家
系ニシ不審ナリ
南朝ニ在リニ云ク
永十八年七月廿
七日飛驒国司佈
小路尹頼纒ヲ誅ス
トアリ是ヲアヤ
マリ傳ルモノ
カ古城部佈小
路家諸系因
ヲ併セ考ヘシ
定利家ハ美
時ノ時ナルヘシ
小笠原持氏ト
アルハ誤ナリナリ
持長ナルカ

代目ニシテ参議藤原尹纒朝臣ハ小島ノ城ニ居タ
リ此国司一國ヲ治テ繁栄ナシトモ南朝ノ宮方
日々ニ衰テ足利尊氏天下ヲ奪フ然レトモイマ
タ一統セス依之哲クハ無衰ナリトイヘトモ美満
ノ時ニ至テ飛驒征伐有ヘト朝倉九門依
甲斐小太郎西大将ニテ大野郡ヨリ発向ス郡上
穴間ヲ経テ京極近江守哉中笹津ヨリ小笠原
信濃守持氏討入シカハ尹纒國中ノ武士ヲ催シ
フセキタカウトイヘトモ終ニ運命尽シテ志永
十八年八月十三日小島落城シテ国司尹纒ヲ朝倉ノ

家人井上新兵衛討之凡国司四代年教八十二年
武田勢飛羽攻入之事

天下猶亦乱シテ信長尾陽ニ起リ謙信哉後ニ
働キ信玄ハ甲斐ニ霸タリ飛羽其間ニハサマレテ
所ニ在リニ銚ヲ争ヒ合戦止リヲエス其頃
益田郡櫻岡ノ城主江別佐三木ノスヘタルト云
其子孫ニ三木大和守直頼其子右兵衛督良
頼入道雲山其子右京大夫自綱入道休菴代
ノ當国ヲ領スシカルニ廣ハ東高堂ノ城主山城守
宗城ト不和ニシテ相互ニ彼ヲ亡シ其跡ヲ

按元永祿七年
甲羽武田家ヨリ
飛羽子光寺ヲ攻
リ未解甲湯野
鎧ニシテ永祿三
年六月飯富三
郎兵衛母利馬
守三ノヲ以テ此
時
江馬常陸守ヲ攻
境國三トリテヲ
又永祿七年甲子四
月飯富三郎兵衛
ヲ以テテ御キ四
月中ニシテ半國ノ
主江馬常陸守ト
之侍大將隆參多
良兵衛甲羽ヘ召
連タリトアリ此
子光寺ヲ攻ル
或ハ廣東甲羽ヘ
内通シテ三木ヲ
攻ル等テ曾テ
寫鑑ニ載去又
實未詳又飯富
ハ首級永祿八
年山懸ト改メリ

奪ヒ國ヲ治メントハカル山城守宗城甲羽ヘ使者
ヲ以テ信玄ニ通シ三木ヲ初メ飛城ノ諸將ヲ七廿
ニト約ス故ニ永祿七年七月十八日信玄ヨリ
山懸ヲ飛羽小ハ賀郷子光寺ヘ廿シムケ當山十
九院ノ衆後三木ヲ背キテ宗城ニ力ヲ合スヘキノ
趣ヲ申送ルトイヘトモ十九院ノ衆後等聊承引
セス鳥越山ノ安幸ニ被害ヲ搦ヘ楯籠テ松倉ヘ加勢
ヲ乞トイヘトモ三木如何思ヒケニ一騎モ加勢ヲ
出サスサシトモ衆後ハ莫トモセス中ニ三木宝光坊ノ
玄海普門院ノ亮得吉祥院ノ尊順説法院

按ルニ子光寺
 鐘銘ニ云ク架
 崇山子光寺因
 福山堂塔諸伽
 監志始成欽
 歎之餘天文十
 年西午國至三
 大和守直建立
 之トアリ然ルニ
 此ヲチチ光寺記
 三不載ハ不審ナリ
 凡天文十午ヨ
 リ永禄七甲子マ
 テ年教録ニ十九
 年ノ同ナリ此
 ヲトリテカヘ記
 スルモノカ

不動院蓮華坊ノ阿舎梨カ射出ス矢先抄出ス
 鉄炮ニ捕武具モ夕マラハコソサレトモ寄手ハ各ア
 ル大将無ニ無ニ三ニ攻允間衆徒棄テ捨テ防キ
 戦トハイヘトモ人ラハ詮方ナク終ニ落城シテ残ト
 ウ等思ヒニニ落行ケル武田方勝利ヲ得テ
 一山ノ院ニ火ヲ放テハ一時ノ兵火ニ亡失ニ允
 山懸三郎兵衛孫勇威ヲ振ヒテ三木カ城ヲモ
 賁ニ落サントスル処ニ載後ノ謙信又信列川中嶋出
 張ノ由告来リシカハ山懸早く兵ヲ引テ甲列ニ帰允
 江馬家滅亡之夏

然ルニ江同常陸少将盛ハ越中新川ノ領分中
 地山ニ城ヲ構テ譜代ノ家老神代川上和仁等
 ヲ入チキ具身ハ甲斐ノ信玄ニ仕ヘアリシニ謙信
 方ヨリ中地山へ押カケ攻ケレハ川上神代和仁
 等々マラスシテ方々へ逃落ヌ又将盛甲列ニテ
 此有サマヲキ、弥信玄ニワカヘ其上高原圍城
 寺ハ吉美ナレハ甲列ニ迎テ信玄へ人質ニワタシ
 ケレハ信玄是ヲ還俗ナセテ江馬右馬允ト名乗
 ラセテ手勢ヲ預ケ幕下ノ先鋒トシテ既ニ飛驒
 国退治セント極ムニ木自綱是ヲ圍大キニ敵馬

三木ト戦ヒ討死
 トアルハ誤リト見
 江馬ハ枚
 崎ノ城ニ押ヨセ
 嶋時光ト戦
 討死シタリト見
 枚サキノ城ノ下
 ト併セ見ルヘシ

キ国中ノ諸将ヲ觸カヌラヒテ手勢一千余人
 引卒ス廣瀬山城守モ此トキハ三木ニ縁ヲ組シ故
 休菴ニ加ル江馬常陸少手勢三百餘キニ越中
 落去ノ家臣和仁川上神代等ノ士卒ヲ引卒
 シテ相加ル故ニ高原ヲ出馬シテ荒城ニ討
 出テ責戦フ三木ノ勢并ニ廣瀬牛丸大勢カ
 ナリトイヘ共奪盛物ノカストモセスノキイタリ
 相戦ヒ自身一文字ノ大薙刀ヲ以テ大勢ヲ
 切崩シ追立ニ勝ニノツテ戦ヒタル久小嶋
 時光三木方ニ加勢カシヨセ来ルユエヘニ廿シ

モノ江馬モ戦ヒ疲シ八日町ト云所ノ橋ノ辺ニ
 立ヤスラヒ居タル所ニ牛丸又大郎生年十七
 歳只一騎カケ来リ切テカハル奪盛彼ナキナ
 タヲ取直シタリシカ運牽是ヲテトヤ思ヒケン
 長刀ヲ打捨牛丸ヲ呼ニテ汝大將ノ首ヲ取ル
 法ヲ知タルヤトイワテ首ヲ差入ヘテ牛丸ニ討
 セケリ牛丸首ヲ得テ立去リシカハ江馬家臣
 川上左エ門尉月縫殿少和仁經氏神代其以下
 ノモノトモ走歸リ此首サマヲミテ月枕ニ討死
 スアワレムヘシ先祖經ヨリ教代弓矢前ニ

携りて言ヲ取シ家ノ一時ニ亡ヒ失シ憂痛ハ
シキ有様ナリ輝盛ノ賤ハ八日町ノ橋ノ辺リニ
塚トナス代ミノ領主タルヨリ尊敬シテ御墳ト長
刀ハ牛丸取ツテ後ニ金木ニ進上スルトナリ

小鷹利落城之事

カクテ三木休菴ハ松倉山ニ新ニ城ヲ築キテ
居住ス天正八年廣瀬山城守宗城ハ牛丸
亦太郎トハ弟テ親切ナリシカトモ三木ト縁
ヲ組シ故牛丸ヲ亡シ前ニ国司ノ一跡ヲ奪ヒ
トラント謀リ家臣磯村長十郎廣瀬助之進

ヲ西大將トシテ二百人ノ軍兵ヲ添テ小鷹利
ニ差向ケル是ヲ聞テ牛丸亦太郎其身ハ城ニ
有ナカラ伯父後藤帶刀重元牛丸九馬亮重
清後備前守
ト号ス牛丸治郎右エ門親次亦二百餘人ヲ
相添テ古川ニ於テ一戦ス双方對テニテ引退
ク翌年天正九年和睦シテ廣瀬牛丸之ハ
ラクハ無憂ナリケルカ次子ニ牛丸威衰ハ元三
又天正十年正月廿七日廣瀬三木西旗ニテ大
軍ヲ催シ小鷹利ニ差向スル牛丸又右エ門尉
城中無勢ニシテ叶カタリヤ思ヒケン其夜

指スルニ此牛丸一
 黨ノ中牛丸備
 前守重信常列
 三行依竹家ニ社フ
 ト云ハ誤リナリ依
 竹家ニ向氏アリ其
 家説ニ云ク飛騨
 國日守小路家族
 小鷹利飛騨守
 藤原光政天四軍
 中飛利ト云ク
 常列ニ来リ依竹
 美宜ニ奉仕ス子
 孫白右近白飛騨
 ト云コトナリ

城中ニ篝火ヲ燒捨テ牛丸又右門渡辺至水
 日筑前牛丸次郎右門日對馬日丸馬亮
 後藤帶刀山賀新兵衛彼是五十余人
 城中ヲイテ、城中ハ落行ケル三木廣瀬
 急ニ追カケシカハ角川ト云呼ニテ後藤重元
 返シ合セサシニ相戦ヒ行年六十二歳終ニ
 戦死ス是ニヨツテ牛丸對馬以下廿四人同ク
 ウチ死ナソシタリケル其ヒマニ又右門ヲハシメ
 其外ノトモカラ三十四人城中水無瀬通り
 ヲシテ落行ケルカ越中富山城至依之陸奥守

二責出カシ夫ヨリ越前ハ落行越前青龍山ノ
 城至金太五郎八長近ヲ頼公伯父牛丸丸馬
 亮ハ依々成云ニ降参シ牛丸備前守重信ト
 改ム後ハ常列ニ行依竹家ニ仕フト云

三木上洛之事

斯テ三木休菴國中ニ成ヲ振ヒ国司ノ一跡ヲ
 奪ヒ上洛シテ国司号ヲ給リ帰国ノ節右兵衛
 督良頼ノ望ニヨツテ先祖累代ノ江列宇多
 源氏ヲ捨テ先国司ノ家名ヲ継姉小路
 大納言藤原自綱入道久安ト号ス舎弟右

格ニ三木休菴
 元国司家名ヲ
 継キ大納言ニ任
 去リ未詳
 後人誤リ櫻
 記ニモノナルハシ

松倉ニ篋ラセ三男元頼ハ小島時光ノ家ヲ継テ松
崎城ニアリ國中三木カ太刀影ニ伏セスト云所ナシ

金木ハ飛列討入之事

天正三年信長公ヨリ拜領シテ越前国大野郡中ノ
領主金木五郎八長近入道法印此葦ハ青龍山
城ニ居住セラル飛驒國中悉ク三木カ為ニ責七サシ
民モツル國中是乱レタルヨシ聞及ハレシカハヒソカニ業
内者ヲ求メ飛驒ノ画図ヲ以テ軍議晝夜急リ
ナシ物之処ニ鎬山豊後守カ弟右近大夫久安ニ責
落サシ青竜山ノ城下ニ来ル是ノミナラス白川内ヶ島

格ニ此浪人
川尻備中守氏
信三ハナシ氏
信カ子川尻助
平金木ニ仕ラ
天正十五年法
印ヨリ川尻助
平授知知行ノ
目録川尻カ子
孫所持セリ

兵庫及氏理ノ家臣河尻備中守氏信一家ノ恨ヲ
蒙穿浪シテ大野ニ来ル長近是ヲ近付テ郡上
遠藤九馬亮慶隆大隅守胤基ニ通ニ加勢ヲ
乞ヒ味方ニナシ則郡上長滝ト云所ニ小城ヲ攝工
テ飛驒ノ押トシテ鎬山九近川尻備中ヲ入置所
ニ飛列ノ浪人江馬右馬次ヲハシメ氏族并ニ牛丸又
右工門等時ヲ得タリト悦ニテ飛驒ノ御先手仕ラシ
ト聞傳ヘ次第ニハセクハル然ル処ニ天正十年六月二日
於京都武將織田上総少殿家臣明智日白守光秀
カ為ニ害セラシ給フヨシ長近ノ嫡子金木忠次郎

格ニ此下キ信長
信忠河父子也信
長本能寺信忠
三條ノ城ニ於テ
生害タリ京
都ノ武將上総
少トノトアルハア
ヤマリナリ

按ルニ飛羽征伐
 ノノ三回後凡
 土記ニ天正十年
 信長ヨリ金森
 ニ命セラレトアリ
 信長生害後
 再ニ秀吉ヨリ
 命セラレタルモ
 ナルハ
 法印ノ養子長
 屋喜三ハ稲葉
 一鉄ノ外孫長屋
 將監カ子ナリ則
 金森出陣守可
 重ト稱ス是ナリ

長則モ同日二條ノ城ニ於テ忠死ス此時哉中富山
 ノ城主依ノ陸奥守飛羽高堂ノ城主三木久安
 心ヲ合秀吉ノ下知ニシタカワス是ニ依テ天正十三
 年ノ春羽柴筑前守秀吉哉中富山へ御馬ヲ出
 サレ依ニ或ニヲ攻給フ陸奥守終ニ討負秀吉
 ノ軍門ニ降ル此トキノ軍ニ金森長近御味方ニ
 於テ軍功他ニ異ルカ故ニ秀吉公御悦喜上意ナ
 マナリ七月七日富山ヨリ四里飛驒ノ方ニ筈津
 ト云所へ御着座アリ其川向ニ三村ノ在家アリ
 何トソ放火セヨトノ仰有シ此ニ長近ノ馬廻リ

長屋喜三可重只一人馬上ナカラニ川ヲ東越エ在
 家ニ火ヲ掛焼捨テ立帰ル牛丸又右門改親モ
 依ニ責ノ軍功ニヨツテ大圖ヨリ御感アリテ
 尚戦功ヲ可抽旨仰被下ケル御帰陣ノ砌長
 近ハ飛羽征伐ヲ仰付ラレテ手扱次第ニ伐取リ
 テ知行スヘキ旨仰出サレケルトナリ是ニヨツテ
 天正十三乙酉年八月上旬金森法印飛羽へ討入
 長近此時六十二歳ニ則長屋喜三可重ヲ養子
 トス歳二十八西大將二年ニ別レ進スルセリ法印
 ノ方ニハ江馬右馬亮錫山左近大末石徹白彦

按之此時天百千
三斗加勢水勝藏
トアルハ謀リシ勝
藏ハホシ武藏守
長可ト称ス天心
三斗甲申四月
乃尾カ小牧ニ
放テ戦死タリ

右三門川尻備中守牛丸又右三門等飛羽葉内
者ヲ先手トシテ相隨フ人ハ岩田弥助田嶋
勝太遠藤宗右三門根尾庄右三門大塚権右三門
田能村源次加勢ハ本以勝藏遠藤九馬少
廣隆ヲハシメ凡一万ヨキニモ及フヘキ越中長谷
ヲ経テ飛羽ニテ屋ニカリテ討入ル可重ノ方ハ
田嶋大郎ハ篠保太郎九三門長屋甚藏遠藤
西服大塚日根野川合中島松山時枝山藏葛西
矢野馬場阿波賀山内等其勢子五百余人郡上
ヨリ野ノ俣口ヲ経テ入ル所ニ下山竜ヶ山峯救テ

所ニ三木カ軍勢支ヘタリケルハ金太夫大軍ト云々容易ニ
討入カタク郡上和良通り下京ヨリ討入リケルハ

三木防戦松倉落城之夏

斯テ三木方ハ金太夫討入ノヨシ聞及ヒ籠城兵糧
ノ支度ヲコタラス国中ノ武士ヲ召集メテ其身ハ
高堂ノ城ニ楯籠ル味方ニ来ル者共ニ小嶋時光
日元頼白右近大支細六郎三門廣瀬織戸具外
野武士ノ類ヒ其救ヲシラス楯籠ル然ルニ金太夫
法印ハ高堂ノ城ノ追手ニ押寄合戦ヲ初メント
又加勢ノ輩ハ廣瀬川原ニ備テ立ツ然ルニ加勢

方ヨリ金太ノ陣工使ヲ立テ各取掛クヘキヤト
アリシカトモ丈ニ八及フマシキノヨシ返答有テ頓テ
兵ヲ進メ自身鎧ヲ取テ攻戦ヒ追結即時ニ
城ニ乗入シカハ城兵防ニ力尽テ久安甲ヲ脱キ
降ヲ乞ヒ京都ノ方ヘソシ路行ケリサテ可重ハ松
倉ノ麓ニ陣ヲ張既ニ取掛ラントセシ処ニ高堂ニ
テ敗軍セシ三木ノ残黨松倉ノ城ニハセツワル城
將秀綱是ニ少シカチエテ堅ク守ルトイエトモ
長道又寄手ニ相加リ又然ル処ニ可重ノ陣取ニア
タリヲ介候シテ走廻ル者有松倉方ノ是怪大將

細集ト云フ者ナリ金ノ莖ノ指物ニ月毛ノ馬ニ打
ノリテ進退誠ニ通シ歎味方ノモノトモシハラ
ク見物ニテ居タリシヲ可重大キニイカツテ我
陣中ニ人ナキカコトシ誰カアル彼ヲ討取参ルニ
トイフ言葉ノ下ヨリモ黒鹿毛ノ馬ニ乗タル武者
一騎カケ出シ彼者ニ向テ言葉ヲカケ手綱ヲ
繰テ近ツキ寄ル歎モヤカテ馬ノ尻ヲ引返シ巨ニ大
太刀ヲ又キモツテ無ニ無ニ切結フサラニ勝負モ
見ヘサル歎ニ駒ヲナラヘテ落タリケルアワヤト見
ルニ黒鹿毛ノ馬ニ乗タル武者上ニナツテ首ヲ取

梅ノ島時
 光ハニホニ加勢
 高堂ノ城ニ籠
 ルトアリ又松崎
 ノ城ニコモルトモ
 アリ不分明法印
 初メ古川御ヲ伐
 シテ入自見之ヒテ
 高堂ノ城ニ大野
 郡松崎ヲ攻トリ
 ケル松崎ハ則古
 川ノ在リ取初
 ニ明取高堂
 ニ籠ルカ時光カ
 終リ未詳其餘
 ノ姓名各終リテ
 不詳

曰シク延ノ指物ヲトリソハ歌ノ馬ニ乗カヘテ可
 重ノ本陣ニ立歸ル松倉勢是ヲ見テ討留ント切
 カレハ金赤方ニハ是ヲ討セシト入乱レテ責戦ヒシ
 カ金赤方其日ノ勝軍ニ彼首ニ金ノ造ノ指物ヲ
 副テ取シ兵ハ山藏縫殿助ト云フ者ハ法印又
 子是ヲ感シ即時ニ知行六百石ニナシテ錦ノ陣
 羽織ヲ手ツカラ山藏ニ結ヒニケル去程ニ城中
 日ニ戦ワカレタル折フシ後ノ山上ヨリ放火紀テ
 燃上ル城中ノ上下アツテフタメキテ今ハセンカ
 ナク皆教ニシ洛行ケル是ハ法印萬テ計略ヲ廻

ラニ城中ノ侍ニ藤濃新藏ト云フモノアリシニ内
 通アツテ藤濃返リ忠ヲシタル故トソ聞ヘ久
 安降参ノ後京都ニ有テ天正十五年病死セシ
 ト云リ秀綱ハ高直ノ方ヨリ信判ヲ心サシ洛行
 ケルカ信及大根川ト云フ処ニテ郷民ノ手ニ掛
 リ鉄炮ニ打レテ死スト云フ此節小嶋時光
 円元頼ノコモリタル松崎ノ城モ没落シ又其外
 江名子ノ畑六郎右云門向右近大丈等ヲ初メ所々
 ノ城主皆法印ノ為ニ責七サレ一國ニ平均ニ治
 メケル金赤方ノ武勇ノ程タクヒナクユソ聞ヘケリ

翌年金赤可重飛羽ニ入部セラル益田ヨリケル
 処ニ一宮右工門大夫三宅御士舟坂又右工門ト云者ニ
 申舟下原ト云フ所ニテ可重ヲ鉄炮ニテ
 子ラヒシカトモ可重ノ運ヤ強カリケシ立消シテ
 又右工門生捕ラル然トモ可重イカ思シケシ年
 ナメスケ置シシナリ其後三宅弥野心止スレテ固
 中ノ残黨ヲカタラヒ可重ヲ打取ント一宮ニテ待
 ラケケルヲ可重ノ先手田嶋勝大、笹俣太郎九工門
 鑓ヲ以テサシクニ突山明ス其日ノ一番高名ナリ
 ナ、ヨツテ三宅命ヲ捨相戦フト云エトモツイニ

折負テ討死ヲソシタリケル三匠カ毒子其外残
 黨皆梟首セラシ鑓山麓ニ首塚ヲ築カレケリ

金赤所ノ城築之事

翌年法印ハ蛤ノ城ニアリテ高山ニ新城ヲ築キ遠
 藤宗兵衛ニ千五百石ノ知行ヲアメエテ高山ノ
 城代トセリ可重ハ古川ノ城ニ居シ一カ石ニテ部屋
 任分ナリ家老ニハ西原右近ヲ附置ル益田郡萩
 原ニモ城ヲ構ヘ美濃国上有知ノ任人タリト云
 フナル佐藤六九工門當時金赤家ニ昵近セシヲ
 則城代トシテユシヲ守ラシム大岡秀吉御在世ノ

持スル佐藤六九
 工門未由未詳永
 禄二庚申年駿州
 今川美尾羽羽
 向勢揃ノ所ニ
 佐藤六九工門ト
 出ツ其後金赤
 ニ附屬セシト見エ
 タリ子孫今テ尾
 刈竹腰家ニ
 ト云

間ハ法印伏見ニアリシカ御他界ノ後ハ京都押ノ馬
 場ニ居住セラシ専ラ忠勤ヲハケマシケルガ中ニモ去
 ル慶長五年関ヶ原御陣ノ軍功ニヨツテ濃羽上右知
 一万八千石金田三千石都合二万一千石ヲ御加増シ
 此因ケル御陣ノ時父子トモニ留守ナリシ心ニ長
 近ノ舎弟金忠掃部少輔可憲石田方ニ有シカ金
 忠ヲ味方ニ附ニトテ飛羽ニ来ル可重使者ヲ以テ
 御馬ヲ入ラレ候工一戦ニ及フヘキヨシヲ申遣シ乞
 ハ叶ヒシトヤ思ワシケン早速逃歸リケリ大坂落去
 以後尾羽ニ来リテ子孫アリ金忠少輔之進ト云フ

金忠戰功并法印家督之古史

濃羽郡上城主稻葉右京目苗一徹齋石田方タルニ依
 テ遠藤但馬守慶隆金忠出雲守可重兩將ハ備
 ノ城工取掛ライドシ戦フ所ニ遠藤ハ軍ノ利ナク
 シテ引退クト云エトモ金忠ハ年ヲシマス兼戦々々
 責入ケルニ終ニ勝軍トシ成ニケリ此節味方討死ノ
 面ハ牛丸又右門田嶋太郎ハ吉田孫四郎南部宗四郎
 安藤右兵衛今井平助馬場弥次郎宇佐美内記
 伊藤備前栗鹿作十郎長屋甚藏田能村助右門
 鈴木新平田能村孫惣曾我平八上田丸太郎等シ

按ニ慶長五
 年之御陣金
 忠戰功ハ在
 茲ト同ヘタ
 然ルニ三合
 戦ノ次子
 不記戰功分
 明ナラス可
 惜又ハ
 濃羽郡上城
 或ハハ
 幡ノ城トモ
 出セ
 ノイナリ城
 下
 ハ幡町ト云
 フアリ故ニ
 俗アラ
 ムリテハ幡
 ノ城
 トモ云ヘリ

又西肥右近曰九門曰吉助平井孫郎棚橋庄助伊
 藤權兵衛石神久次飯沼原右門渡辺小平太是等ハ
 首ヲ得テ高名ヲ極メタリ田島勝太依久間九門
 垣見九左門葛西今右門等ハ先登ニス、ミテ
 戦ヒし手負ノ面々ナリ物シテ打死手負ノ輩
 五十餘騎ト聞ヘ其後大坂御陣ノ時金忠ノ手
 へ生捕ハ人首八百打取ケルト云然ルニ慶長十三年
 申八月十二日法印京都ニ於テ卒去セラル金龍院
 殿ト号ス此時法印ノ実子二歳ナリシヲ駿府へ
 召ノホセラシ上首知一万八千石ヲ宛行ルト云ヘト

梅正ニ金忠法印
 没後家督ハ養
 子出雲守可重ニ
 托カシ三万八千石
 ヲ賜ル此時三歳
 ノ実子ノ金忠ト
 五郎ハ長光ト
 長光早世多シ
 後ハ実母ニ一
 生三子名ヲ下
 カルモノ也

モ不幸六歳ニシテ早世セラル去ニヨツテ法印ヨリ
 附置ル、如ノ旧臣肥田、主水島、四郎兵衛池田
 図書三人ニ千石宛ヲ下シテカレアラタニ御旗本
 ニ召出サルト云フ并ニ金田三千石ハ法印ノ後室
 久昌院へ下サシシカ是モ卒去ノ後ハ召上ラレケル
 トナリ出雲守可重ハ大坂落城御帰陣ノ御京都
 祇園ニ於テ卒去セラル依テ可重ノ三男駿守ニ
 奉仕セラシシ重頼へ家督無相違仰付ラシ是ヲ
 出雲守重頼ト云フ法印ナラシニ剛公ノ軍功奉
 テカゾエカメシ小田原御陣ノ供ニハ田嶋勝太根尾

勝三郎遠藤賴母大塚元吉岩田弥助大野惣元門
今井理元門石徹白彦右門笹侯五郎元門等ヲ
初ノ騎馬ノ勇士凡三百五十餘キ、中古飛
別治乱其アラマシキ書記スモノ是ナリ

飛列軍覽記終

○飛列子光寺記

竊尋加長山子光寺開闢人皇十七代仁德天皇立都
難波四海波治、万民帰徳時東仙道形駭国大野郡小八
賀御出羽平山上有窟石巖苔滑万木生茂異于他也從
此窟窟儼出現、身長十八丈一頭西面四肘西脚足指前後出
也着甲冑帶兵杖三午結印是則救世觀音化身也野人村老
見之恐怖欲遠境逃散于時窟儼示衆曰我是依有佛法守護
王法契約當此代出現全不可違背速可致官仕由依仰人民奉
親進也于時為草創子光寺平均山上之土地處得石櫃開石
蓋見之有紺紙金泥妙法華經一部八卷二十五帖加長山一帖圖

按此書七
事實ノ不内
年代ノ異軍
並記ニ等ノ前
卷ノ首書
ニ併セ見ルニ

浮檀金指曇子手觀音一體故山号加害畏寺号于光然
飛騨国鬼神今出現由流布天下達獻同故
為鬼王退治官軍至濃別矣向雖然此地
深山幽谷道断橋危而輒依難攻入官
軍空歸洛重有公卿會議雄仁被下向此時宿
儼美濃国立牒使曰吾是依有佛法守護
王法契約當此時出現往昔於靈山釈迦說
法會座仁德宿儼俱為警固于時佛曰仁德者
末代正先日本国王位宿儼何時節御即位
大夏可致傳授雄仁亦有彼通仍招雄仁

於當国大野郡位山被傳授畢則御笏木作副
奉進上也其例于今無闕如代天子自位山被
召笏木盖此謂欽自中古成真言秘密道場
一山十三坊建之一基塔婆安置金胎西部
曼陀羅寫千手千眼二十八部衆業師十二
神尊容修護摩捧卷教奉祈天長地久御願
圓滿至末寺末社不違勝計雖經末末永爭可
有荒廢一山大衆学侶教侶官無他夏係所
人王百七代正親町院御治世當国々司三木
大和守直頼嫡孫美頼長男自編入道久菴

依改道辛親類骨肉成怨讎于時廣順山城守
宗域屬于甲列武田對久菴企逆心依之信玄
振猛威永祿七年甲子七月十八日祭向當國
到千光寺牒送曰國司自綱搆無道骨肉家
人皆以惡之乘弊欲攻伐之大衆此苟存忠義
者可免刑罰不矣速可破却之一山衆後矣
諷曰夫吾山者祈帝城宝祚鎮四海逆浪平
自國怨歎古今既度之也見捨大檀那先進
爭夫無道信玄衆議一同而則追放使蔭武
田大怒以大勢圍之一山大衆身裁牽搆城郭

捐篋頓相觸國中乞後攻勢可皆捨兼已館
無一騎加勢篋城之大衆等結忍辱慈悲衣袖
懸者提惡魔降伏劍戟走菟向歎身重不
惜防戰中宝光院玄海普門院亮野吉祥院專
順說法院早海不動院亮延蓮花坊是等射
必弓鉄炮捐物具不咏寄手山下支而不得
近舟雖送救日既城中矢種王業盡助兵不
馳加捐篋衆徒或手負或討死武士弥勢重
晝夜且暮被攻誥終衆徒悉敗走則亂入而
懸火魔風吹来一山堂塔院々寺々各菴揭

住僧房一時炎滅嗚呼悲哉救万經論聖
教代之勅筆御願文狀迦御袈裟金泥法花
經圖浮檀金之千手觀音當此時成灰燼
古人曰利人天必福之凶人天必殃之著服
看之武田之一家為信忠卿被滅畢此時死
殘僧徒穿浪他國其中權大僧都佐印玄
海昆茅大僧都亮輝兄弟二人打殺信列經二
十餘年畢頃四海大亂國主招自滅必死列
為射哉又討子凶兄弟欲奪其一跡國司久
菴謀濃氣健本以大隅守塩屋筑前守東甲

斐守土川肥後守此等之輩為大將日一夜
合戰無止時中塩屋筑前守哉中新川郡打
随柁尾猿倉構城郭教十年今住居所國
侍以越後謙信加勢攻之於城中筑前守討
死行年六十二歲如斯雖振武威運軍衛頗
一族令埋没先表既顯首平清盛之時三
郎右工門景綱從出當國以來國士長止出
仕剽劫隣國荒域郡高魚郷江馬小四郎時
盛領之益田郡構城郭三木大和守直賴
在城大野郡鎬山豊後守廣瀨右近將監小

田刈城前国司姊小路宰相明山松崎城小嶋時
光白川内島氏理右城、晝夜兵出各相戰如
右異朝戰國七雄前鋒裏根無隙借尋盪賜
彼江馬先祖者桓武平氏苗裔修理大夫經盛
卿妾腹出產孤也一平家滅亡後彼妾抱一孤
塚北條時政後号江馬小四郎經經與北條
義時不和之間對北條家欲成讎故為賴家
卿年被遠流當国子孫相繼領知高原此
時九馬以時盛長男經盛為用骨柄勝人
哉中国教之所切取中地山指邑鄆川上中勢

建武亡魂且為天下靜謐祈禱改萬山殿曰
跡於嵯峨立天龍寺則余諸國七道國一靈
地建之一院安国寺受夢想国師宗派臨濟
教法達磨宗為末寺從是自綱威強
大掠鎮國中則自綱於松倉山構城館
國中人民碎骨苦肩有教年一城家成就
石壁甚高集大石成堤誠城構雖過分
智以似淺彼三木先祖江別佐木之月姓
多賀太郎子孫也教代居任當国以武
為權威前国司姊小路殿家人牛丸九馬

益田郡中邑
禪日寺
三木直賴母小祥
尼香諾三男
藤氏直賴

允渡辺筑後守同至水正山賀新兵衛此等
被背出無力国司下向越中一処後藤帶刀
離一家重全從道致御供終於戰場墜卒
畢因茲三木美賴致上洛達獻聞望国
司号有公卿美議曰彼又大和守直賴察
奉御馬号辨慶鹿毛無双駿足也在京之
間或長橋局之所縁下国後儲美賴依此
好美賴被補所望畢其子自細相繼称国司
公家之後号久菴吉房右三門督頭細為鎬山
豊後守美良子于時先込江馬一黨前国司從

少補被居置誠雖達武勇不知仁美血氣勇者
也早為取家督討又時盛積惡餘殃可有今
一家輩猜之此家相傳重宝小烏太刀青山
琵琶清盛云赤旗敦盛纒其外平家累代
重物雖有救多滅亡至時係企惡行也三木用
之為誅無道自細卒三千餘騎欲高原打入
將盛三千余兵蒐出合戰自細不保引
退所江馬競来荒城大坂打越於八日町相戰
所小島時光勢自細終日戰屈江馬勢追敵
四角八方奪盛終討死前国司士卒自細與

力牛丸又右工門取首貫鋒見之川上縫殿助
日九工門尉和尔以下之兵双枕自害哀哉從
輝經教十代携弓箭前施武威骸骨未乾谷先
立消矢爰安國寺別漁長老志依為大且那
則宮葬禮規式抑此安國寺七堂伽藍名跡七回
四面輪藏納五部大乘經東西衆寮搜五燈銀
寮直指人心祖師心印用山未歷行狀未尋
决建武年中足利尊氏將軍為四海武將天
下一統後遠國未穩南方朝敵動龍未九
重是以法力不靜豈有太平期且為弔元弘

類背久菴年楯籠所一結句舍茅錫山頭網橋
男信綱廣瀨宗城企叛逆自綱大怒信綱
呼松倉城竊害之錫山差遣長傲甚平尔
然一人忍入敵城得利莫如何思処女討之
頃掛火廣瀨山城守害茅兵庫以宗真見
之難遁思榮乞降用度一城引退所自綱
後不顧禍討取宗城移高堂城二男秀綱
渡家督預錫山城三男基賴為小島柙御所
時光養子預松崎城衛雖一國平均諸人
憤深親類恨多悲乎討舍茅女長男奪其

地豈善改于時天下武將右大臣平信長公遠
尋先祖平清盛公二十代後胤織田備後入道桃
藏嫡男也其頃号上總少幾内近国中国西
国討平威凌天地時幕下伺公候人濃列住人
金杰五郎八郎長近後兵尸卿号素玄法印
討取越前国大野郡暫在那遥闻當国無正
體討無道救民致武所也以自力欲討取先
以當国繪圖窺案内所鎬山豐後守舍吉房
平野尤近被憎久菴約廣瀬兵庫以宗真共
至大野具外白川住人内島兵庫助氏理家入

川尻備中守氏信蒙一家猜曰宰人哉前金杰以
近舟之且暮致謀略愛美濃国郡上西遠藤於長
滝抜城為押飛列廣瀬鎬山川尻以下之軍
兵籠置依之江馬丸馬助牛丸又右工門等宗徒
兵不招馳集已欲飛列打入所天正十二年六月
二日平信長公為明智被滅天下如圖夜依此
騷動国々企叛逆於越中依内藏助振武威
引合飛列不致上洛依之時武將羽柴筑前守
豊臣秀吉公後号從一位右大臣関白有御勤
座金杰屬彼手在陣無程一揆靜謐所兼約

東牛丸廣瀬川尻江馬鎬山以當國指因啟案內
故天正十五年八月上旬哉飛西國境自猪谷打入
頓國中襲來此日小島時光用城逐電久菴
大驚楯菴高堂城雖防戰二騎交國勢吞回
天氣對上方官軍救子騎爭可一時被操
破落行勢散、逃隱山林久菴威尽、降長近
軍門脫甲助一命故未向敵秀綱去鎬山城哉
信別一所於大野川暗、被討、鄉人、浮谷流長河
先年伯父顯綱討因早難遁者哉法印一國攻
伏被上各為目代養子長屋丸近將監嫡孫

前出雲守源可重其頃喜藏丸為大將氏族長
屋一堂遠藤西脇根尾田島日根野大塚國侍
牛丸河尻江馬鎬山哉前大野住人篠侯石
徹白河合中島松山時枝葛西矢野馬場阿波
賀山内此等宗徒為兵都合千餘騎今在國
斯所先已餘黨催一揆放山、谷、揚旗一宮
神主入道三宅廣瀬兵庫从宗真為大將日、夜
、排戰所上方勢此二不屈機蒐虫、合戰荒
手入替戰三宅終討死頭被曝、歎門、毒子悉擄
捕於鎬山麓掛張付、殘憂名未代哀成次、美

也當國一揆令誅戮都鄙無其隱秀吉云聞召
喜藏丸勸急被召上預御感年未滿三十而
揚名天下誠無比類譽也其後法印在下國
大野郡高山構城郭小島分一跡宛給出雲守
即小島山拆城為法印鷹狩見廻在所傳
聞于光寺由來信心銘所有再與志於大眾者
可加助成被下知殊北方久昌院別被添志則前
國司久菴旗下候人多留當國屬金本家故余
彼等依被成令條對玄海亮輝二人被通案内
因茲二人自信判令歸國玄海者為國分寺住侶

此國分寺者為于光寺末寺之一基戶塔雖安
置匠王善逝教年亂世堂舍殘礎庭州深
成鶴尊漸結庵室奉祈國土泰平所素
玄法印被加修理業師堂迴廊如形造立板
亮輝專順登山尋住未跡苔生露深野于
搏荒大日尊容之靈地二天双光名苑松柏
茂無跡借觀之誠哉國諱堅固五、百年
佛法取俱消息感淚深衣無惜松風副哀
慟声角伐木薙草而造立一字堂舍結篠
葺菴令住居急致上洛四條大佛師對談

前五二十八部衆令造立二天十三佛成寺形
畢昔於國中听之在園多被寄附別小八賀
郷坊方下保以下村、為修理職料回禄以
来依無其沙汰統取立堂舎檐頗有如無也
夫白山人皇四十四代 元正天皇御宇養老
年中依有瑞夢泰朝大師開闢三峯大汝
大御前別山也三国無双名山靈驗殊勝地
也跨三箇国哉前加賀飛騨是也然美濃国
長滝寺者為白山末寺繁昌盛于今是則
千光寺末流也本寺衰微末寺是栄盛頗

千光寺似無面目愚僧歎之欲新素玄法印雖
然彼法印依為大岡秀吉公無双寵臣平生被
在京不往自国終慶長十三年八月十二日於
洛陽逝去往年八十三歲息必雲守源可重
得国讓從古川城被移高山府或吾寺遊覽
之砌述其意可重悦喜不斜早牒送長滝寺
如之則々可随千光寺若有猶豫美以公方之
御下知急催促之矣玄海老者旅行雖
堪悲且為佛法興隆且為国為世為人凌
險難觸催一山所一寺宿老悉以不違背

如古可隨從心諾仍立歸言上刺吏雖然夏大
儀之餘首尾不調就公私紛多處天下錯亂軍
大坂一戰秀賴公滅亡諸軍凱陣後於平安城
源可重病死于時慶長二十德因六月三日春
秋五十八歲保國七年雖所向靡無遮留無
常使為前法印菩提所於柴野建一院金龍
院是也可重葬日寺時長老松岳紹長引導
之此時家臣山藏繼啟助赤石門九郎二人為
冥途供切追腹異于他高名也依此紛統
無具沙汰是偏于光寺漸滅基須予就老老

因分寺讓女大阿闍梨尊雄隱居觀音院幽
因閉居窗前湛瑜伽法水澄三密月去累代令調
進笏木中絕之條當今御代再繼絕與廢調
御笏木示尊雄阿闍梨以傳奏廣橋大納言殿
捧之法孫沙門勿令懈怠愚僧兄弟為佛法興
隆苦身心教十年亮智於本山普門院遷化慶
長二十年正月十五日往年七十一歲亮輝往
生之後吉祥院專順當年八十八難面存余摺
任山朝三暮四之烟幽衰分野也相構我法孫
之沙門令達獻聞訥公武以十方檀那助成

於今建立一字堂舎一基塔婆者用山宿儺菩薩
中興亮禪僧都追善專佛法昌之王法無量天下
泰平無所疑愚僧春秋八十三歲今既明日不知
老身之今日暮間待計書不盡詞々不盡心矣
冗賢之勿令輕慢 右一卷者予從天文昔至元
和今集所令見聞雜談於隱遁閑暇雪中後然
書綴竊梓知音懷然骨肉雖入火上已捨筆
跡留慈尊出世之曉 願以書寫善面見弥陀佛昂
滅無量眾歸入阿字文 于時元和七年四月吉日玄海誌之
飛列于光寺記終

○飛列三沃記

夫飛駄国大野郡一宮水無大明神ハ往昔七社ニテ
御本社一宮ハ 御歲神也末社ハ熊野宮天満宮
稻荷官富士權現兒權現箭太神社具外本地堂鐘
搏并殿神樂殿各覺ナラハテ綺羅天ニ御キ是建
治年中藤原朝高朝臣ノ御造営國中第一ノ大社々
リ神領ハ一宮郷々々野郷代々ノ社家十二人就
中永正ノ頃ニ至ツテ御宮守一宮民ハ少輔長綱ト
号ス神祠ノカタワラ坪ノ内ト云フ一所ニ屋形ヲ構
エテ居之長綱嫡男一宮右三門大夫国綱ハ則チ永

持スル此書
單鑑記ノ統
二向ノ前卷ノ
首書ニ併セ
見ル

禄元亀ノ頃三木右京大夫自細ニ録ヲ組テ妹尊
トナル是ヨリ家名ヲ改メ三木刑ア大夫国細ト
云フ後ニ入道シテ三沢ト号ス天正ノ初ニ至リ片
野石浦無救河山ノ口等ヲクロ工領シテ天正五
丁丑歲山下ノ城ヲ築キ居之神職ヲ家臣赤果
ニ譲リ其身ハ全ク武門ニ入テ近郷ニ其威ヲ振
ヒケリ其頃國中ノ士分ニ領ストイエトモ三木自
細ヲモツテ本所ト定メ守シリ然ルニ自細天正七
卯四月高原ノ江馬ヲ討亡シテヨリハ弥威勢ヲ
国内ニ振ヒ松倉ニ居城ヲ築キ任ス又国司ニ任シ

テ入道ノ後ハ久菴トシ号シケル然所ニ運領クキ
先表ニヤ天正十年ニ至リテ頻ニ金赤家討入ナ
リト專風説シテ上下男女ノ口遊ニモ久菴禄ハ
鶉テユサル金赤様ハ小鷹テユサル追ヒ籠ラレテ
音ヲ留ルトソ諷ヒケル扱モ金赤五郎ハ長近入道
法印同嫡男喜三可重ハ秀吉ヨリ當国ヲ拜領
シ天正十三年乙酉八月二日當国ニ討入ケル三木久
菴廣東高堂ノ城ニ於テ防戦ストイエトモ叶ワ
スシテ終ニ城ヲ明渡シテ濃判郡上長滝ニ落
行ケリ

天正五年
京ヲ病死

本城松倉ニハ藤末新藏ト云者

返り忠ヲイタシ本丸ニ火ヲ掛ルヨツテ忽落城自細
カ息秀綱城ヲ遁レ去タリシカ信判大根川ニテ害
セラレ畢ス是ヨリ長近古川蛤ノ城ヨリ鎬山ニ移リ同
八月十六日一ノ宮へ出馬ス先手ハ羨濃ノ梶田衆ナリ
時ニ三沢カ家士天木山下等郷民ヲ語ラヒテ半
途ニ出テ鉄炮ヲ以テ暫ク防クト云ヘトモ三沢如何
思ヒケン一鎧モ合セス山下ノ城ヲモ明テ山ノ口或ハ
河内ノ方ハサシクニ引退ニカハ右西士ヲ始メ郷民
等モ思ハニヲキヌキ又長近禪入屋敷ニ馬ヲ立ラシ
軍士勝因ヲ作テ山下ノ城ヲ乗ツ取ケリ則可

重是ニ在城セリ長近ハ鎬山ニ帰城也角テ三沢
カ行方ヲタツ子ヘキ昔觸ケルニ念ナクモ翌十七日
ニ山ノ口村ニ於テ是ヲ生捕リ鎬山へ引渡ス其外
女子小児等ハ所ニ逃去リテ深ク隠ル中モ三
沢カ息女辨ノ君ト云ハ乳母ヲキヤチト云老女
三沢カ重代ナル秋廣ノ刀ヲ指シ弁女ヲトモナヒ
人目ヲ忍テ草深キ谷ニ入り木ノ葉茂レル山嶺ヲ越
夜ニ入テ衛ク河内ノ大坊ト云所ニイタリテ百姓
弥市ト云者ヲ頼ミテ入ケルカ弥市心アル者ニテ
深ク是ヲイタワリ翌日ニナリシカハ衣ルイナトノ露

ニ濡タリニテヤカテ竿ニカケテ乾シ置タリニテ追手
ノ諸士川向ヨリ是ヲ見付テ不審ナリ我先ニ
川ヲ越シテ大坊へ押渡ル弥市ハ是ヲ見テ息女ナ
ラヒニ乳母ノ女ヲ隠スヘキヤウナシセニ方ナクテ兼テ
家ノ内ニ大根ヲ貯ヘテキシ穴アリ是ニ二人ヲ隠シケ
リ同モナク追手ノ輩入来リテ色ニ攻同ト云ヘ
トモ弥市聊モ知スト云其トキ追人ノ曰ク落人ノ
有證據ニハ汝等カ所持セサル衣類ヲ表ニ置タリ
此上ハ隠スニ及ハス必スヘシ若出サヌニ於テハ家ニ
火ヲカケヘシト云依テ是非ナク深ク隠セシ所ヨリ

二人ヲ出シ渡シケル諸士是ヲ請取則鍋山ノ城ニ
ツカワシケリ尤其頃ハ益田郡ノ中イマタ平均セス故ニ
次ノ為トシテ足利大將ニ頭ヲ尾崎ト云所ニ附置シ
ケルト云又宮村ノ内向坂ニ彦兵衛ト云フ百姓アリ
彼モノツク々思ヤウ人ハトモアル我ハ御城へ参ラシ
ト思ヒ腰ニ鎌スカヒタルマニニテ山下ノ城エソ登リケル
番ノ者トモ如何ナル者ソト問彼者申ヤウ此向ニナル
同坂ト申所ノ者ニテ候御見舞ノ為ニ是迄参上仕
ルト申ケレハ其卦可重聞給ヒテ大キニ感セラレ則
居同近ク召出シ汝カ名ハ何ト尋ララル彦兵衛ト申

ケル時ニ此辺ノ百姓共ハ何方ニ居ルソト在ケレハ謹テ
何モ山小屋ニ逃籠リ居候ト申ス如何シテ具百姓
共ヲハ村里ニ返付ント在ケレハ彦兵衛申ケルハ我等
方ヨリ殿様ノ御免ト申遣候ハ早速皆々吾家ニ
ニ罷歸ルヘキト申ケル故ニ其通ニ可相計旨ニ扱酒
ナト給ワリテ我屋ニカエリ右ノ旨卦ヲ申合メ便ヲ
遣シカハ何レモ悦ビ皆々我屋ニカヘリケリ其後三沢
カ領分七ヶ村ノ者共長近へ新詔申ケルハ三沢殿
法躰ノ身其上我々カ主君ノ儀ニ候ハ御慈悲ヲ
加ヘラレ我等ニ御預ケ被下ナハ難有可奉存ヨシ

申ケル長近聞ワケラレテ村民ノ願ニ任セテ免サレシカ
ハ三沢ヲ請取久々野村ノ草菴ニ移シ念頃馳走
申ケリ息女并ノ君ハ人質ノ為ニヤ錫山城ニ留
メテ妾トセラレケルトナク借暫ハ事静リタリシニ
土民ノ中ニテ双立タルモノ共彼草菴ニ参リ集リテ
申ケルハ吾等昨日今日マテモ主君ト宗メ奉ル所ニ
今引替テ五郎八入道殿ヲ大守トナス莫如何計無
念至極ナリ因茲我等存立シハ國中ニ廻文ヲ出
シ君ヲ大将ト定メテ一揆ヲ起スモノナラハ五郎八
殿ヲ討取莫案ノ内ニ是非思召立タマエト寄

進メケル程ニ三尺止ヌナエス領掌ニ何レモ能ク相
計フヘシト言ケレハ夫ヨリ所ニ寄合ニ評議之宛
メ廻文ヲ認メケリ其卦ハ来ル因八月十六日國中一
統セシメ一ノ宮三沢殿ヲ大将トシ金吾ヲ可討捕者
也ト恙ク相認メ百姓三人ヲ選ミテ乞食或坊主ノ
如クニ振立彼廻文ヲ持セ國中ヲ語ヒシニ則國中ノ
百姓共皆一味同心ナソ成シニケリ然トモ此上日城内ハ
知レサリケリ救日ヲ経テ因八月十四日ノ晚方ニ至リ
其旨聞エタリシカハ翌之十五日ノ朝回坂彦兵衛ヲ城
内ニ呼ヨセテ彼人申ケルハ其方家内ニテ心安キ家

来二人ニ松明一荷ヲ持セ今暮方ニ差越ヘシ其者共位
山通りノ業内セサセントソ申付ケル彦兵衛畏リテ
其如ク支度仕リ暮方ニ城中へ下男ヲ召ツレ参上其様
子ヲ見ルニ侍兩人鎧ヲ着シ馬ニ乘リテ出行タリ叔夜
中ニ尾崎ニ至リ前ヨリ聞次ニ附置シ足怪大将ニ从
テ円道ニテ夜明方ニ城内ニソ帰ラシケリ是ニ一揆等
ニ取籠サセテハ如何ナリトテ如此ニ于時因八月十六日
甲申ノ日午刻ヨリ宮山下ノ百姓共樵ノ様ニ出立テ
恙ク山内ニ入ル所候ノ事是ヲ見付テ同日申ノ上刻ニ近
辺ノ家々へ足怪ヲ差遣シ土民ノ妻子ヲ生捕テ

人質部屋ニシテ入置シニ其暮方ニ揆等百姓共大将
ナニ措突鎗様打鉄炮ヲ携テ一身ヲ抛攻カルサレ
城中堅固ニシテ其甲斐モナカリシ所ニ成上刻城中ヨ
リ鉄炮數十挺打カシレハ一支モサエス一揆等悉ク敗北ス
長近屋鋪ノ椽ニ立タマヒ白旗ヲ以テ真シク進ヘシト
アリシカハ少モ不躄上野追追拂ノ夜中ノ長追無益
ナリト味方ヲ集メテ是ヲ見ルニ二人モ過ナク首級ヲ取
テ諸卒黒岩ニテ勝因ヲ作リテ錫山ノ城ニシテ歸ケリ
其夜ハ門ノ櫓ヲ堅ク守ラセ無別糸交終ル扱山下城
ハ同日暮方ニ三尺カ回領七ヶ村阿多野川上筋ノ百

姓都合五百余人久々野ニテ人教ヲ召ヘ三尺入道ヲ大将
トシ旗馬印ニハ暖簾古淡紙ナトヲ取結ヒ思クニ差上ケ
テ曳ノ声ヲ出シ山下ノ城ニ押寄ル城中ニ少モ不騒暮
時ヨリ丑ノ刻迄鉄炮ヲノ口ヘ遠矢ニ放チカケカハ分野
サナカラニ沃辺ニ飛カフ螢火ノ如ク折シモ十六夜ノ一上
ハ鬼カ何魚ハ其俣ニ白日ノ如クナリ時ニ揆等城ヨリ
二町計下ナル林ニ火ヲ掛テ城内ヲ焼拂フヘシト評
美シテ手々ニ火ヲカクル城中ニモ兼テ覚悟ノフナレハ此方
ヨリモ火ヲ付テ林ヲハ忽ニ焼拂ヒシカハ鬼カ何魚ヘノ
矢道ハ弥ヨクナリテ一揆ノ奴魚救百人忽ニ打倒サレ是

ニ怖レ大形ハ我ニ成リテ逃行ハ夜モ衛ハ明ハナシ
十七日ノ卯刻ニ至ル三沢下知シテ二百人ハカリ宮へ取
込ラセ備ヲ立ニ王門ヲ大手ト定待カケテ所ニ鎬山ヨ
リ長近出馬アリ備ハ長蛇ナリ若宮ノ辺ニ金太家ノ大馬
印白キ吹貫見ユルト曰ク山下ノ城ヨリモ縁熊付タル
金ノ團座ノ小馬印ヲ備ノ中程ヨリ跡ニ持セ騎馬四
五十馬ノ及ヲ不行ニ列テ大幢寺下ノ野ニ出テ鎬山勢
ニ行向ヒ則兩將禪入屋鋪ニ旗ヲ立ラレ軍士ヲ以テ二
手ニ分一手ハ回坂ヨリ押寄一手ハニ王門ニ責寄西備
四五十間程宛ヲ陽テ鉄炮迫合時ヲ後ス処ニ一揆等

大形ノ宮ノ山嶺ヲツタヒテ落行殘卒討ル者救ヲ不
知衛落殘心モノ共ニ三十ハカリ三沢ヲ守護シテ并殿ニ列
籠ル処ニ回坂ノ寄手後ヨリ来ルヲ見テ坪内へ逃行テ
谷ヨリ山上ヲ越テ落行ケリ三沢ハ庁野ノ郷民三人ヲ
尤右ニシタカヘテ鎬ヲ引提ニ王門ヨリ本陣ヲ目カケ真葛
ニ突テ出寄手ノ大勢ヲ散ニ突立ル回坂ノ人救後ヨ
リ取結テ郷民二人ハ鉄炮ニテ打倒シ一人ヲ鎬ニ
テ突留ル大将三沢ハ槌打小金後号ト云者是ヲ討留
ケル是三沢ヲ生捕ニセン沖カク遠廻合ニセラレシト
ナリ又其刻大幢寺ノ住僧人救二十計ヲ召連月毛ノ

馬ニ打棄テ久々野ノ方ヘ逃行シテ西大將是ヲ三沢ト
思ヒ追駈テ生捕ルヘシトアリケレハ諸士我先ニト志
所ニ可重ノ足程打弥藏大幢寺ノ家人ニ討ル猶諸
卒進テ山梨マテ追駈シ久々野ノ方ヨリ益田筋ノ一揆五
六百計出来リ追入ノ内松山兵助ト云侍小坂ノ溝上
何某ト云者ニ鉄炮ニテ討ル此躰ヲ見テ不思議
一揆ノ大勢ナレハ追入ノ兵士進兼テ山下ヘ引返ス彼
一揆ノ者共ハ宮ヘ打越シ同坂ニ陣ヲ取ル西將如何
思ハレケン山下城ナラヒニ大幢寺ヲ燒拂七直ニ鎬山ノ
城ニ帰ラレケル長近錦ノ陣羽織ヲ着シ鹿毛ナル馬

ニ乘リシカ一揆ノ残黨舟坂何某滝殿ト云フ所ニ
忍ヒ居テ鉄炮ヲ二三度マテ打カケケレ共立消
シテ玉箇ヲ離トナリ角テ一揆等川ヲ隔テ跡ヲ
慕ヒシ若官追ハ来リシカ片野ヘ出テ七曲ヨリ向
多野日ノ見ケ城ニ指コモリ一兩日アリテ悉ク離
散シテ失タリケリ叔三沢カ首ヲハ鎬山ノ林麓ニ
於テ楸門ニカケ同ク三沢カ娘并女モ強敵ノ子ナ
ルカ故ニ國中見コリノ為ニトテ田島兵庫是ヲ
下知シテ五明村ニ於テ磔ニシタリケル猶國
中殘黨ノ首共ヲ爰ニ取集メテ首塚ヲシ

キツカセケルトナリ



飛列三澤託終

